

大地

S 55. 4. 20
No 4
浄国寺

身に受ける

山崎 武雄

物を受くるに心を以てし
法を受くるに身を以てす

(金子大栄師の言葉)

先日訓覇師の講義の中で、教えを求めて放浪の旅を続けられた俳人尾崎放哉さんに次の様な句があるとの事です。

○ いただいたものは両手で受ける
頂いたものは両手でいただいて
お受けしねければ、下さった方の
有難い心持も、品物の有難さ、勿
体なさも判らぬのではないでし
うか。

今私共の生活は豊かに(?)な
りましたが、大人も子供も、物を
受くるに心を以てすることが失は

れて行く時、味気なさ、むなしさのみ残ります。本屋さんの話ですと生活こそ豊かになつたが、心の寂しさ、虚しさをいやす為か、今一寸した宗教書ブームが起つてゐるとの事です。沢山の宗教書、名僧知識の講話の録音テープ、居乍らにして、容易に手にして読み且つ聴く事が出来ます。だが果して宗教、就中仏法は興隆し、世の救いとなつてゐるでしょうか、頭をかしげざるを得ません。真実の教はそんなにたやすくわかるものではありません。それでは絶体にかからぬものでしょうか。

五智国府に配流された親鸞が説かれた念仏の教が、どうして僅かの間にあれ程広まつたのでしょうか。親鸞は僧とは申すものの、都の人であり、貴族の出の方であります。聞法する者は、農民、漁民、職人商人等所謂當時の下層の庶民で文字を読める人も少く、人柄も言葉もすべて相通じる訳はないのです。わかる訳はないのです。併しこの様な人たちの為こそ教がある。仏の救いがある。わからぬ訳はないと確固たる信念をもつて説かれた親鸞の言動が、愚かな、業深きこの身も仏の御本願に

より救はれると、身を投げ出してきく人等に、岩に水がしみ入る如く、受け入れられ、感じられ、弘まて行つたのです。全く不思議な事の様ですが、感応道交とはこの事でないでしょうか。厳しい越後の自然、苦しい労働にたえ、頭健な身体となられ、皆に法がわかつてもらえた喜びをもたれた親鸞は、自信教人信、それより関東の新天地におもむわれ、ここでも庶民の中に入って、真実の法を説き、忽ち高田、下妻、横曾根、鹿島など数十万をこす門徒、後年の関東教団の素地を作られます。

金子師の言葉に
光いよいよ強くして闇いよいよ深く闇いよいよ深くして光いよいよ強しとあります。ひとりひとりが無碍光の中にある事を知れば知る程自己の愚かさ、業の深さを自覚し、自己に目覚めたる人は仏の光明の強さを身を以て感ずるのです。

身に受ける聞法の喜び、有難さこれだけがほんものでないでし
うか。



子に孫に

住職弟 山崎 正信

夏生北大卒業結婚

○桑園寮二段ベツトよ卒業す

○吾子も父となるか春灯盃重さぬ

孫誕生近し

○生れ来る孫待つ日々よ春隣り

○越の春は汝が誕生に明け初むる

和如二月二十七日誕生

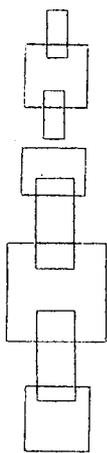
はるか誕生日(三月六日)

○赤きマント似合う娘となり

誕生日

○春風邪の児に文書きぬ腹這いて

(註)弟正信は、シベリヤ抑留時代より作句を始め、俳句歴三十余年、おだやかな人柄、深い思索、鋭い感覚により独自の句境をもち、なかなか秀句が多い。



父を想う

法林寺

波康龍

この度父の死去にあたり、父が生前大変お世話になりました浄国寺様より、父のことについて書いてほしいという、おねがいを書いていただきました、ありがたうお礼を申し上げます。

◇八十才をすぎてからも自転車を乗りやすい小型のものに切り替え走らせていた父が、たまたま朝のうたたねの時に人さんの用水川に落ちた夢を、わがことのように受け止めて、自転車で乗ることをやめて、小さな手提げを手にして発病まで寺役に余念なく廻って歩かれた父。

◇何処へ行っても自分の子供、自分の孫のようなつもりで、何の遠慮もなく、時間のたつことを忘れて話し合っ帰って来る父。

◇一年に一回東京方面にいる子供たちのところに出掛けて行って、家のことを案じて、一週間と留守にすることのできない父。子供以外のところと言え、京都か名所旧蹟を訪ねる外によるこびを

持たなかった父。

◇「私は一斗升に、とう棒でなで一杯になるまで生きるんだ」「娑装中の人をみんな送ってから逝くん」と言っていていながらも、一斗升が一斗升にならないうち、娑婆に沢山の人がいるうちに静かに人の手を借りずに眠るように逝った父。

◇三月十日午後四時三十五分東京方面の子供たちの枕許につくのを待っていたかのように、目に僅かの涙を浮べて静かに息を引きとって逝った父。

◇こんな父の姿を見てたとえ「九十才の長寿であった」と申しながらも、檀に飾られたにっこりほほえんだ在りし日の写真を見ると無性になつかしさがよみがえって来る現在です。

◇晩年になって子供たちのもとろに行く以外に何の楽しみを持たなかった父が「生きるよろこび」をいただいたということは、若くして養父を失い、唯お念仏によって与えられた仏のお力と、皆さん方からいただいた温いお気持ちとお声かけによったのではないかと、深く深く感謝いたし、厚くお礼申し上げます。

◎同朋新聞手にとつて
入院中の父を見て

金子先生の記事見る姿
めがねをかけて伴纏とおし
ジツトみつめる腰格好
元氣なときのそのまんま
しばらくぶりの面影に
見とれてしばし口つくむ

◎ああしてこうして
こうしてああして

これが九十年最後のわがままか
せめて九十年のご苦労に
これぐらいのこととしてあげたい

(註) 亡くなられた砂波賢龍師は拙寺
の報恩講その他一切の寺の行事のた
びに、又檀家の葬儀等には必ず一緒
につとめてくださった。

全く名利を離れて、求道精進された
在りし御温容が今ものぼれる。
この方にお遇いして「住職道」とは
何か、身を以って教えて頂いた事は
有難い御縁であった。
今回特にお願ひして御長男の方に
「父を想う」の文を書いて頂いた。

私の木

山崎慎子

庭の北東の一隅に、色々の木達
に混って一本の木蓮が今、花を
一杯に咲かせて立っている。これ
は亡くなつた大祖母の一周忌をつ
とめた四十九年の春のお花見に、
お濠に並ぶ植木屋にあつたもので
ある。「さらさら木蓮」という札を
つけた丈二尺程の、小指位の幹の
頼りない一本の木が、果して根づ
いてくれるかどうか、さらさとい
う花の色や形がどんなものかも分
らぬまゝ、頭にえがく記憶の中の
木蓮と六百元という値が気に入っ
て求めたものである。
そして又、庭の中に「私の木」が
欲しいという思いが働いたのも否
めないことだつた。父や母が庭木
を慈しみいたわっているのを、ま
るで他人事のように思い、又、花
を咲かせて美しいと思ふことはあ
つても、あくまでも傍観者である
自分が齒痒かつたのである。「私
の木」を持つたからといって、
すぐに庭中の木々への愛着が深ま
るはずは勿論ないのだけれど毎年
一本の木の成長を確かめるとい
う目標ができたことは、やはり楽し
いことであつた。
少しづつ丈も伸び、幹も太つて、
何度か春を送り迎えしながら、花

を咲かせることはないまゝ、四年
程が過ぎ、ようやく、天に向つて
誇らしげに花開くようになったの
は、昨年あたりからである。
穢が熟す、という言葉そのま
まに、あの小さかつた木が、今年の
春は、私の背丈をはるかに越して、
幹も幼な兒の腕の太さ位にたくま
しくなつて、花も四十に余る数を
つけて、まさに今が盛りである。
さらさらの色は、花芯に近い方はえ
んじ色のあの木蓮色であり、残り
の部分には純白で、堂々とその顔を
天に向けている。
幾度かの厳しい冬を、囲いの中
で耐えながら、ついに庭の土にし
っかり根づいた木蓮は、今「私の
木」になつて、お濠の桜が散り初
める頃から、その花を楽しませて
くれるようになった。
そうした朝のお茶の時に、父は
私に次のようなメモを下さつた。
「あの木蓮が、貴女と共に太く
たくましくなつていくのを見るの
は楽しみです。」

編集後記

百花一時に開き、緑したたる雪国
の五月の美しさは格別ですね。
四面に護持会の予決算書のせまし
た。本山関係の諸経費の増額、火災
保険の加入等にて予算も増しまし
た。何とぞよろしくお願ひ致します。